

さんじゆうさんげんどうむなぎのゆらい

卅三間堂棟由来

〔解〕 説宝曆十年（一七六〇）「祇園女御九重錦（ぎおんにようご）このえにしき」の外題で大坂豊竹座初演。若竹笛躬、中邑阿契の合作。卅三間堂の由来や横曾根（よこそね）平太郎の話、祇園女御の話に太宰師季仲（すえな）か・源義親の反逆を配した五段構成の時代物でしたが、文政八年（一八二五）、命の恩人平太郎と夫婦になった柳の精お柳の子別れを描く三段目を中心に改訂し「卅三間堂棟由来」として上演、以後はほとんどこの形で上演されています。

〔あらすじ〕 紀州熊野の山中、太宰師季仲らが鷹狩りの最中、鷹の足の紐が柳の木に絡まり身動きができなくなつてしまいました。柳の木を伐り鷹を解放そうとするとこへ横曾根平太郎が通りかかり、矢を射て紐を切り柳の木を救います。木のそばにある茶屋にはお柳という娘がいて、やがて平太郎と夫婦になり緑丸という子ももうけましたが、実はお柳は人間に姿を変えた柳の精なのでした。

一方、白河法皇は頭痛に苦しんでおり、柳の木の梢にある前世の髑髏（どくろ）が原因だとされ、その柳を棟木として卅三間堂を建立することになります。柳の木を切る音が聞こえてくるとお柳は苦しみに耐えつつ平太郎に身の上を明かし、法皇の前世の髑髏を渡すと、これを手柄として出世するように言い残し消えてしまいます。

切り倒された柳の木を運ぼうとしたところ、誰が曳いても動きません。皆が難渋するところへ、緑丸を連れた平太郎が現れ、緑丸に綱を曳かせて欲しいと頼みます。平太郎の木遣音頭で緑丸が綱を引くと柳は易々と動くのでした。

平太郎内の段

夢をや結ぶらん

妻は辺りを立ち退いて、奥を覗いつ立ち戻り、おづ
く傍へ立ち寄りて、揺り起こせども夫は寝つきの高
鼾。風が持て来る斧の音、伐木とうく〜てうく〜と、
木を切る音やこたへけん、お柳は身内の苦しみを、
ぢつと堪へて立ち寄れど得も岩代の結び松、われは
柳のみどり子が顔を眺めつとつ置いつ、やうく〜に
気をしずめ

「才、それよ、互ひに顔を合はせては、身の上語る
も面はゆし。寝入り給ふを幸ひに今、自らが言ひ残
す、必ず夢と思さずと、あからさまに聞いてたべ。ナ
ウわれこそ誠は柳の精、雨露の恵みに生ひ育ち、か
やうに夫婦となることも、一方ならぬ因縁ぞや。前

の生にて誓ひたる、契りを結ばんそのために仮に女
の姿と変じ、柳が下に待ち受けて、夫婦となりしも
五歳の、春や昔の春の頃、季仲が鷹狩に、鷹の足緒の
かゝりし時、数多の武士に伐り崩され、既に枯れな
んこの柳、その時にお前が一矢の手柄故、鷹を助け
て葉柳の、枝に障りも、アレ〜〜〜またもやこゝ
に散り来る葉は、われを迎ひに来るか」

と、思へばやる方詮方も、なく〜見やる足元へ、散
り来る柳の葉隠れや、乱るゝ心押し静め

「その時の情けの恩、送る月日も重なりて、柳の花
の、コレこのみどり丸、もはや今年で五歳の、春秋の
重なれば、乳がなくとも育つべし。成人の後々は、父
の弓矢を受け伝へ、潔い名を挙げてたも、ヤア /
〜。母は今を限りにて、元の柳に帰るぞや、必ず
草木成仏と、回向を頼む夫よ子よ、離れ難なや悲し

や」

と、言ふ声さへも忍び泣き、立つて見、ゐて見声上げて、『わつ』とばかりに泣き叫ぶ。音に目覚ます平太郎

「さては夢とも現とも、聞きしは真でありけるか、何とてつれなくやるべきぞ」

と、抱き留むれば一間より、老母も共に転び出で

「様子は聞いたコレお柳、嫁女なう」

と、呼ぶ声も散り来る柳の葉隠れに、形は消えて失せにけり。『そこよ』『ここよ』と母と子が、尋ぬる音にみどり丸

「母様、どこへ往かしやつた、母様いなう〜、母様」

と父が後ろに駆け廻り、尋ね迷ふ幼子を見るに堪えかね父親も

「みどりが母やい」

「嫁女なう」

「母様」

と声をはかりに三人が、尋ね廻れば流石にも引かるゝ心執着の、又も姿を現す有様

「ヤア母様か」

と駆け寄る幼子夫も涙の声を上げ

「非情の草木といひながら、情けあればこそこれまでに、睦まじく馴れなじみ、一人の若を儲けし身が、何とて振り捨て帰りしぞ。せめては母を見送るまで、ともに介抱してくれよ」

とかこち嘆けばやう〜に、萎るゝ顔を振り上げて「伝へ聞く、安倍の童子が母上も、丁度我が身と同じこと、一人の若を残し置き、信田の古巢に帰りしとや。それは野干の年経る身、われは元より草木の、

帰る古巢の柳は今、切り崩されて枯れ柳、帰るといふは消ゆる身に、何とて形を残すべき。哀れと思し給はれよ。白河の法皇の御悩み頻りとて、都の使ひ来たりつゝ、我が身を切り捨て申すなり。もはや朽ち木も時を得て、一字の棟木となることも、一つは妙なる法の縁、仏果に連れし緑なれば、情けの恩を報ぜんため、一つの形見参らする」と、平太郎が手に渡し

「それこそは白河の法皇の前生の御頭なり。それを手柄に御身の上、再び出世をなし給へ。必ずくみどりがこと、お頼み申し参らする。エ、ハ、ハ、離れ難いや可愛やなア。アレ／＼風の音につれ、柳の糸を切り払ふ、斧鉞がてう／＼／＼、罅はこゝに魂極る、時こそ来たれいざさらば」

さらば／＼の声の下、姿は見えずなりにけり。『わつ』

とばかりに三人が、闇より闇に迷ひつゝ、互ひに手に手を取り交はし、前後不覚に嘆きしが涙ながらに平太郎、我が子を膝に抱き上げ

「ナウ母人、われよりはこの若が、愛着に引かされて、さぞや名残の惜しからん、たとへ姿は見へずとも、柳は妻が亡き面影、今一度このみどりに見せもし、われも見もしたし。蔵人とやらんにも対面せん。

母人にはこの髑髏、仏間へ直し下さるべし。某は今直ぐに、倅を連れて柳が元へ」

「オ、それ／＼、一時も早う孫を連れて」

「ハ、ア、然らばすぐさま、サアみどりよ、来い」

と我が子の手を引き二足三足。深山隠れの山手に、入相告ぐる鐘の音、数えながらもそろそろと、探る足元見付ける母、

「コレ平太郎、そなたは何とぞしやったか」

「コレばば様、とと様は目がみえぬわいの」

「ヤア／＼そりやまいつから」

「ハイさればでござります、一月余りふと鶏目が起
こりましたが、女房にも云ひ含め、これまではお隠
し申した」

「エエ聞こえぬ平太郎。さういふことならとくより
わしにも」

「アアコ何にもお案じなさるるな。したがお前様に
もこの坊めも、今夜からさぞ頼りが」

「フイノ、折も折とそなたの眼病、尚更わしも力が
ない。アアアレ／＼、アノマア雪の降る琴わいの、マ
マ火を灯しませう」

と行灯に、手早く灯し提灯をうつし持ったる緑丸、
箒よ笠よと打ち着せて

「そんならちよつと往て参りませう」

「ヲ、怪我せぬやうの。ソレ緑、手を引けよ」

「アイ／＼／＼」

あいろは見えぬ鶏目の父、杖は我が子を力草、柳が
許へとたどり行く。

はや東雲の街道筋、木遣囃子で地車の、轟く音ぞ勇
ましや

／＼和歌の浦には名所がござる、一に権現、二に玉

津嶋、三に下がり松、四に塩釜よ、ヨイ／＼ヨイトナ

俄かに車地に座り、ゑいや声して人夫ども、押せど
も引けども一寸も、先へ行かぬぞ不思議なる。警護
の武士進ノ蔵人

「騒ぐな者ども、思ひ当たることこそあれ、急くな
／＼」

と制するところへ、身拵えして平太郎、みどりを連
れて出で迎ひ

「さてこそこの木の動かぬは、目前親子恩愛の、別れを惜しむと覺えたり。妻が靈をも諫めるため、何卒綱をこの俵に、引かさせて給はらばありがたからん」

と願ふにぞ

「ホ、さこそ、某もさは存ずるところ、さやうならばこの柳、新宮の浜先まで、後は海手を流さん、

イザご用意」

と勸むれば

「ハ、ア忝し」

と一礼述べ、みどりもろとも立ちかゝり、木遣音頭は父が役、かざす扇もしをれ声

へむざんなるかな稚き者は、母の柳を都へ送る、元は熊野の柳の露に、育て上げたるそのみどり子が、

ヨイ／＼ヨイトナ

「ヤアこりやおれが母様か」

と、綱引き捨て、『わつ』と泣き縋り嘆けば父親は、涙に声も枯れ柳、引けば引かるゝ恩愛の『孫よ／＼』と夕べまで、いとしがつたる老母さへ、道の巷に葬らんと、かき抱きたる孝の道忠義に厚き藏人が、諫めて帰る都の土産。椰と柳の契りたる、連理返りや楊枝村、女夫坂とて言い伝ふ、棟木の由来因縁を、語り伝えていちじるき。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。